実践報告

JFL 環境にいる学習者の「教室外」の人との関係で育まれる学び

—SEND プログラムの実践を通して—

高久　孝幸

要　旨

教師は、教室の中での言語的知識の習得だけを考えるのではなく、全ての学習者が「教室の外」で繰り広げている学習の成果にも目を向けていかなければならない。教室の中での一人ひとりの教師の意識を変えることで、学習者の学習向上にも繋がると、筆者は考える。

筆者は 2017 年の春学期に実施された早稲田大学の SEND（Student Exchange Nippon Discovery）プログラムに参加し、学習者自身が築いている周囲との関係性により、学習の進み方が大きく変わっていくという一つの学習ストラテジーを発見することができた。

本稿では、2017 年 2 月 21 日から 3 月 4 日の間に実践実習をした University of Malay において、教室の中の日本語学習に焦点化するのではなく、教室の外の人々との関わりに着目し、学習者がどのような環境下で日本語の学習、意欲の向上に繋げているのかを筆者の見解を含め考察する。

キーワード

教室の外　タスク活動　場　学習環境　人間関係

1. はじめに　University of Malaya での SEND プログラムの概要

筆者は、SEND プログラムの実践者の一人として、マレーシアの首都クアラルンプール南西部に位置する University of Malaya（以下、UM）に 2 週間派遣された。筆者たちは、UM での全 6 回の課外授業として異文化活動の要素をも考えながら進めていった。課外授業とはいえ、日本語学習に対する学習者のモチベーションは高く、毎回 20 名前後の学習者たちが日本語を学びにきた。

表 1　UM 大学において早稲田生が実施した課外活動の授業内容

1 日目	・共通点探し、ビンゴゲーム、日本のカルタ遊び。
2 日目	・日本のゆるキャラ紹介、日本の特産品を知り、日本を知るきっかけを作る。 ・UM 学習者によるゆるキュラ創作。
3 日目	・「恋ダンス」をみんなで踊り、日本のポップカルチャーに触れる。

4 日目	・日本の伝統文化である茶道体験。日本の「おもてなし」の精神に触れる。
5 日目	・『花より男子』の有名シーンの台詞を覚えて、UM 学習者が各々の役を演じる。
6 日目	・食文化理解、大福作り体験。

上記のスケジュールの他にも、筆者たちには UM の日本人教師の受けもっている初級授業にも見学者として参加し、学習者の学習状況を観察するプログラムも組み込まれていた。

UM の学習者にとって日本人と接する機会がはじめてだった人もいたが、全員から一所懸命に日本語を使おうという熱心な気持ちが感じられ、また見学授業でも UM の学習者の日本語学習に対する意欲が強く伝わってきた。

2. SEND プログラムを通しての学び

2.1 「学習者」の立場、「教師」の立場から観察した UM の学習者の言語活動

JFL（Japanese as a Foreign Language）という環境での学習は難しい。教室では、日本人教師による文法や聴解、読解、作文などの授業が行われ、学習者も日本語に接する時間は十分にある。しかし、実際に教室の中で実施されている授業だけが学習者の学習向上に結びついているのだろうかというのが最初の筆者の問題意識であった。さらに教室の外の世界へと目を向けることにより、学習者がどのような言語学習環境で日本語を学習しているのかが見えてくるだろう、とも考えた。

筆者は、UM の日本文化活動の教室では、教師として日本文化を教え、教室の外では友達として学習者と日本語を使いながら良好な関係を築いた。そのやり取りにおいて、次に教室での教師の役割は何なのかという問題が浮んだ。そこで、宿題でも自由課題でも何かしらの形でタスクを学習者に残すことにした。そのタスク活動をきっかけに、人と交流できる「場」、自由に日本語を学習できる環境を教室の外へ学習者自身で広げていけるように、教師はきっかけを作っていくべきなのではないだろうかと考えたからである。

学習者が教室で目標言語に沿って言葉を学ぶことの大切さはもちろんであるが、それればかりに焦点化しすぎてしまい、教師は学習者の身の回りの学習には関心を持たなくなる。教室の中だけで学習が行われているのではなく、教室の外で学習者たちがどのように日本語を学んでいるのかを教師は教室の中で指導する以上に考えていくべきだと筆者は考える。海外という日本語を学習する環境が限られている中で、学習者はどのような方法・手段で日本語を学んでいるのか、何がきっかけとなり、語学上達に繋げているのかを教師自身が探究し続けることが重要だと気付いたことが SEND プログラムを通しての筆者の成長だった。

2.2 UM の学習者の教室外の言語活動環境

筆者の観察から見えてきたことは、UM の学習者が教室外で日本語を使う機会がほとんどないということだ。日本語が学べる環境が整っているのは教室の中だけである。しかし、学習者たちは教室の外で自身の日本語学習環境を作ろうと努力している様子が垣間見れた。

携帯のアプリを利用したり、教室内で出された宿題をクラスメイトと一緒に勉強したり

していた。機会があれば、早稲田生たちとの対話を楽しんでおり、日本語でメモを取りながらその場を楽しんでいた学習者もいた。このように教室の中だけではできない活動を学習者は教室外で大いに繰り広げていたのである。学習者の日本語学習向上の起因とはなんだろうと考えたとき、まずは周囲の人々（日本人の友達、同大学・同国の先輩、後輩など）の存在だと考える。また、SNS（チャットやＥメール）という非対面の場面などの友達とのやり取りや大学の外で対話場面を創り、学習者は日々教室の中で学んだことをアウトプットしたり、理解足らずのことを他者に質問したりする機会を多くもっていると考えられる。個々には友達との距離感の差異もあるが、SNS 環境などのやり取りの場合において、教室という改まった場では聞けないこと、学習者自身が抱えている問題を解決する場所として役に立っていたのではないだろうか。そこで学習者自身の学習の変化も自覚できるだろう。学習者と外の世界を繋ぐ媒介になる人、物を介して、学習者が環境との相互作用を行い、多くのことを学び続けていくことが学習意欲に繋がっていくと考える。

2.3　学習者の「ことばの力」を付ける「場」

今回の SEND プログラムでは、ポップカルチャー、茶道、おもてなしの心、カルタ遊びなどの日本の伝統文化を織り交ぜながら、「日本語を教える」というよりは「日本を教える・学ぶ」クラス活動が企画された。文化活動の中には、自由に好きなことを話す活動やお互いの文化交流の時間など、様々なインタラクティブな空間を設けた。しかしながら、教えるのは教師（早稲田生）であり、受け身的に日本語を学んでいるのは UM 学習者である。そこにはどうしても言語学習の壁が立ちふさがっていた。学習者側が教室での課外活動に参加しているときは、質問はなく、与えられたタスクをこなし、時間だけが過ぎていった。

筆者は学習者が「何を学んでいるんだろう」と考え、2 週間の早稲田生の考えた文化活動を行い、「日本を教える・学ぶ」とは何かを念頭に置きながら、学習者を観察していった。その結果、「ことばの力」の付く場とは、実は外（日本語教室外）の世界なのではないだろうかと考え始めた。日本語教室の中でできることは、タスクを残すことである。上記の 2. でも述べた、「タスクを残す」というのは、たとえば、日本人（の友達）へのインタビュー課題、ブログ、スピーチ、グループでのプレゼンテーション（教室で発表できるもの）、教室で行うディスカッションテーマの検討、読書感想文など、様々なものが考えられる。それらを学習者自身が日本語教室の外へ持っていき、学習者の周囲の人々に作品を紹介したり、説明したり、質問したりして学習者が入れるコミュニティーを自身で形成し、日本語学習を進めていく。その中でも「母語、母文化を共有する学習者同士が母語で話しているときでさえ、日本語の習得の難しい表現について話したり、母文化と日本文化の相違点について議論したりすることにより学習者は多くを学ぶ」（文野 2004）。

「外」での学習者にとっての「ことばの力」をつける環境は様々な場面に潜んでおり、他者との関係を築き上げていく中で、学習者が自身を変容させていくのである。

2.4　周りの環境との学びを繰り返して

UM 学習者のような JFL 環境下での日本語学習者には、それぞれ異なる学習環境があり、一人ひとり異なる学び方がある。しかし、共通して言えることは、既述のとおり「教室の

外」での人との関係構築が学習向上に大きな影響を及ぼしているということである。

本稿では、SEND プログラムで得た気づきを一例として、以下に JFL 環境とはいえ、UM の学習者も日本語教室の中だけで勉強しているのではなく、様々な人との関わり合い、様々な学習環境の中で日本語を学んでいることを図にした。同心円にかかっている人々が「本人（学習者）」との距離を表し、最もコミュニケーション・ことばのやり取りを図っていることを表している。黒矢印の太さは人々との繋がりの強さを表している。

UM の学習者は様々な人と日本語や母国語でのやり取りをしていた。また、UM の学習者が早稲田生の支援や助言を受けながら、質問や UM の日本語教室で出された宿題やスピーチの発表練習などの場を創っていた。このような相互作用を繰り返すうちに UM 学習者の日本語学習に対する動機は高まり、学習者からも「日本語の勉強に興味が出てきた」、「日本語学習への心構えが変わった」、「UM の日本語教室では、質問できないこと、知らないことをたくさん学んだ」などの声を聴くことができた。

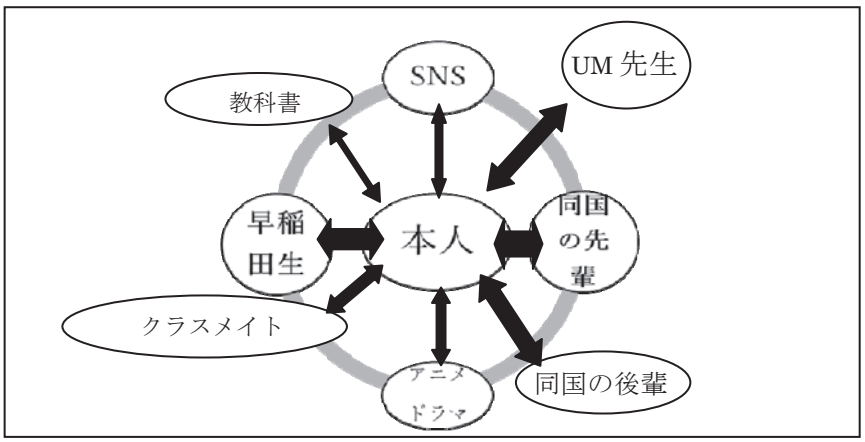


図 1　日本語教室の外での学習者の周囲の人々との繋がり（参考：文野（2004））

2.5 「つながり」から見えてきたこと

UM の学習者は日本語を「個」で学習しているのではなく、文化的、社会的な文脈の中に積極的に参加し、言葉を学んでいる。上図の中で相互に結びついている矢印の関係性を記したが、様々な人・物と関わり合いながら、その環境に適応するように学習者自身で「何ができるのか」を判断し、選択しながら、学びを創っている。

多くの関わり合いの中で、最も影響を与えたのは、「同国の先輩」であった。次に「早稲田生」との関係性である。結果は予想外であったが、先輩とは言葉の壁がなく、何でも相談でき、聞けるというメリットがあるのだろう。また、2 週間のプログラムだったので、早稲田生との信頼性の強弱なども影響していると思われる。時間が経つに連れて、UM 学習者の積極性の変容が見られ、早稲田生たちとの日本語でのやり取りも多くなっていった。

外の環境においては、教室の中とは違い、学習者をコントロールする人・物はなく、自身で考え、行動していかなければならない。その行動が学習者を自律的に成長させていき、自身の語学力アップに繋げているのではないだろうか。

教室の外での人々との繋がりは言語を学習する際、お互いに影響し合う重要な環境デザインになるだろう。

3. おわりに　2 週間の SEND プログラムでの人々との「つながり」

SEND プログラムの 2 週間で得た全ての経験や気づきの中で、最も大切だと思うことは、UM で出会った学習者との関係性である。日本語教育の観点から言うと、UM 学習者が学んでいる日本語、学んだ日本語を UM の学習者が今いるコミュニティーへと伝え続けていくことにより、巡り巡って大きなネットワークが形成される。そのネットワークがツールとなり、日本語を学ぶ学習者が増えれば、それが日本語教育を支えていく一助になり、今後、ASEAN と日本語教育を繋ぐ懸け橋になっていくのだと思っている。

筆者が今後も日本語を教えていく上で、学習者の学習行動、どんな学習環境の中で生きているのか、それらが学習者にどんな形で影響を与えているのかを探究しつづけ、筆者自身が広い視野をもち、日本語教育・日本語教育環境デザインに一役を担えれば何よりだ。

注

1　本稿では、UM の学生を「学習者」という言葉で統一した。
2　「教室の外」の定義とは、先生と学習者がいる日本語の教室以外の場所を指す。
3　本報告書の内容を全ての JFL 環境の学習者に置き換えることはできない。今回はマレーシアでの実践実習で見えてきた考察である。
4　UM の SEND プログラムでは、主に中級学習者の教室外での行動を観察した。

参考文献

高木美嘉（2007）「他の発見から自己の創造を促すコミュニケーション型初級クラスの構想」『早稲田大学日本語教育研究センター紀要』20、pp. 119-136
西口光一（2003）「日本語教育と状況的学習論」『日本語教育通信』第 46 号、国際交流基金、pp. 6-8
文野峯子（2004）『日本語学習者と環境との相互作用に関する研究』科学研究費補助金基盤研究（C）（2）課題番号 13680365　研究成果報告書　pp. 1-16

（たかく　たかゆき　早稲田大学大学院日本語教育研究科・修士課程）